



父母の紙、僕の紙

広上淳一

いちばん古い紙の記憶は父の原稿用紙。仕事部屋の机に積み上げてあったのを憶えています。父はNHKの放送記者で、時々仕事を持ち帰って部屋でごしごし書いていたんです。その背中を見ていた僕は三、四歳、それが記憶に残るくらい、ふだん家で父親の姿は見なかった。ほとんど帰ってこないんですよ。いわゆる事件記者みたいなものだから。

生放送のニュースの原稿は、番組中、アナウンサーの隣の映らないところで書きながら渡して、「ただいま入ったニュースです」とやっていたそうです。

父は戦時中、玉砕部隊にいました。富山の出身で、京都から学徒出陣で千葉連隊へ。あと一週間、敗戦が遅れていたら死んでいたらうとよく言っていました。「この戦争は何だったのか」を考えたい、

それには東京裁判の取材をしようとジャーナリストを目指したそうです。真面目一筋の人でした。

父の紙は原稿用紙、では僕の紙といえば、やっぱり音楽の楽譜。僕の師匠、恩師の先生方は常に五線紙に鉛筆で音符をつくって書かれていたんです。それらの作品を演奏する時に、直筆譜を見せていただく、ほんともう、臨場感があるわけです。出来たてのようなこすれや消しゴムの跡があるんです。そこから伝わるものといったら、とても言葉では表せない、音楽的な何か。

ベートーヴェン先生、モーツァルト先生などの作曲家の遺した直筆譜を写真製版した譜面は、ファクシミリ版といって愛好家の方に人気があります。

星の数のように大作曲家が生まれて、残してくれた音符ひとつひとつ、おたまじゃくしひとつひとつに生命が宿っているのは、紙があったからこそ。今はコンピュータでも作れるようですが、私の師匠の世代は皆、手書きで、大河ドラマのテーマ音楽も手書きです。そのスコアを見ると人間の行い、営みというものが見えてくる気がします。

また、自分が昔買った古いスコアには、



ひろかみ・じゅんいち ●指揮者。東京生まれ。東京音楽大学指揮科卒業。1984年、26歳で「第1回キリル・コンドラシン国際青年指揮者コンクール」に優勝。以来、世界各国のオーケストラで活躍。現在はオーケストラ・アンサンブル金沢アーティストック・リーダー、日本フィルハーモニー交響楽団フレンド・オブ・JPO、札幌交響楽団友情指揮者、京都市交響楽団・広上淳一、京都コンサートホール館長。東京音楽大学指揮科教授として教育活動にも情熱を注いでいる。

当時の書き込みが残っていて、開くと同時に記憶が立ちのぼってきます。

デジタルの楽譜は便利ですが、世界中のオーケストラの楽員さんの九〇パーセントはまだ紙。みんなパート譜をめくっています。楽譜って手垢がつくでしょう、それがまたいいんですよ。紙と一緒に年を取りながら、後まで残るから。

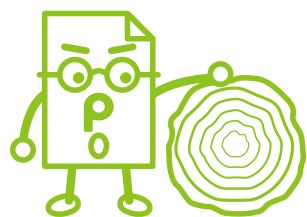
思い出深い手紙とか、カードとか、デビューした時の写真や、音楽雑誌や新聞で紹介していただいた記事とか、紙といえばただの紙だけど、宝物のようなもの。僕なんか別に大した人間ではないのに、こうやって紙に載ると、なんか選んでいただけたような、特別な存在になれたような気がします。

七月におふくろが九十六で亡くなりました。時々、残した手紙や、アルバムの中の写真を見えています。これが、母の紙。ぜんぶ紙。メールとかデジタルじゃない、紙で残ってよかった。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

無駄なく使うこと、得意です。

古紙のリサイクルだけじゃない。建築用の木材をつくるときに出た残りの部分や古い木材、曲がった木など、木材として使い道が少ないものも紙づくりには利用できる。そうやって、資源を無駄なく大切にしながら、紙はつくられているんです。



有効利用している主な木材

- 製材残材** 建築用の木材をつくるときに出た残りの部分
- 低質材** 細い木、曲がった木など、製材には使えない木材
- 間伐材** 森を育てる過程の手入れとして間引かれた木材

紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、<http://kamitsubu.com/>「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

今回は11月3日号です。